

大学病院としてのCOVID-19への挑戦；東京医科歯科大学医学部附属病院の経験と考察

小池 竜司 (東京医科歯科大学 医学部附属病院 副病院長)

2019年末に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、数か月のうちに世界に拡散した。日本では2020年2月に指定感染症となったことにより、感染症法と行政管理の下で診療が行われることとなった。東京医科歯科大学医学部附属病院（以下当院）は感染症指定機関ではなく、感染症専門病床を有しないことから、当初は従来の診療体制を維持しながら可能な範囲でCOVID-19診療に協力するという姿勢であった。ところが3月下旬より東京都の患者増加が加速し、都内の診療体制の切迫が看過できない状況に陥ったことを受けて、積極的受け入れの方向へ診療体制を大幅に転換した。

積極的受け入れ体制を整備するにあたり、診療科や職種の枠を超えた連携や協力体制が必要となり、横断的なチームや部門を複数編成した。さらにプロセスの透明化や学内外への情報公開を行いつつ、リスクを負う職員の心身の負担を軽減するための体制も構築し、これらを同時進行するために、従来の診療を大幅に縮小して人的および物的リソースを創出した。

患者の減少に伴い、従来の診療機能の復帰を進めているが、COVID-19再流行の可能性と規模が不透明であり、病院の財務状況も勘案しつつ微妙で複雑な調整が必要となっている。さらに個々の患者の診療についても、鑑別診断や医療関連感染対策に関する発想の転換が必要となった。こうした当院の経験や課題を総括し、COVID-19が臨床医学へもたらしたインパクトについて考察する。



Online Seminar Series: Seminar Series by Tohoku University WISE Programs "Create the New Normal"

[WEB] <http://www.tfc.tohoku.ac.jp/other-activities/online-seminars/2020cov.html>

1st Seminar: What is COVID-19?

[WEB] http://www.tfc.tohoku.ac.jp/online_event/2020cov/01/